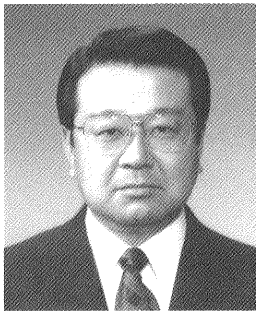


The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

LFPI News Letter

Spring 2000 No.11

地場産業とフィルトレーション技術



当社がある常滑市は、2005年に開港をめざす中部国際空港の建設予定地で、900年の歴史がある六古窯の一つでもあります。常滑は江戸時代から味噌、酒、酢などの廻船が発達していました。特に地場産業の常滑焼は、明治の初め、横浜で下水道管材として「土(陶)管」の需要が発生した時、最適管材として広く使用されるようになりました。

我が社の創業は、この「土(陶)管」に使用する原料を精製、混練、成形する機械設備を製造したのがはじまりでした。しかし「土(陶)管」は、時代の流れにたえず、品質向上や規格化を目指さなかったため、外圧や衝撃ですぐに割れる致命的な欠陥から、急激に他の管材(塩化ビニール管やコンクリート管)に取って替われ、かろうじて現在では、全国で数社が規格品の「セラミックパイプ」を製造しています。多くの窯元は、昭和初期に業種転換を図り、現在では急須、植木鉢、タイル、衛生陶器などが常滑焼の主力製品です。

しかし、この平成不況は、地元の焼き物業界に大きな変革を迫っております。不景気といわれながら、一時はプラスチックに替わられた植木鉢が、ガーデニングブームで一躍活気を取り戻しています。また、タイルなどは、住宅やビル、マンションにおいて、セメントなど他の建材にその機能が奪われています。生き残りをかけて、セメントとセラミックスを融合した建材を開発したり、セラミックスメーカーが樹脂製品を製造したり、半導体製造でも同じような現象がアジルに実践されている状態です。

当社は、1965年までは、セラミックス製造用機器の専門メーカーでしたが、産業界で「公害」という言葉が叫ば

れた頃から、セラミックス製造工程で使用していたフィルタープレスをメッキ工場などの排水処理用に転用することで水処理分野に参入することができました。

セラミックス業界では、中型で高圧タイプだけであったものが、水処理業界では、小型から大型まで圧力は低圧タイプの機種が市場に出回り始めました。

1980年ごろから、我が社は排水処理だけではなく、生産工程での精密分離分野への参入を目的に、分離技術をイギリスより導入し、食品・化学分野に参入を開始しました。某ビール会社と共同でノンプリコート型のフィルタープレスを開発し、食品・化学業界へと展開しております。その後、さらに分離精度を要求される医薬品業界への展開ができ、血液製剤の分画・分離技術への展開も可能となりました。また、最近の建設用骨材製造業界向け濁水処理では、脱水分離されたケーキが、再利用できるように、ろ過・分離する新しい技術の開発に取り組んでいます。900年続いている焼き物の世界は、今後も伝統的な陶芸として伝えられるでしょうが、工業用セラミックス製品は、大きく変革してゆくものと思われま

当社は、コアとしている「粉体」と「フィルトレーション」に関する技術で、新しい市場に積極的に参入し、戦略的に新製品開発に取り組んでいます。しかし現実には、スピードの早い他産業界のろ過・分離に関する要求に十分対応できないのが悩みです。液体清澄化技術には、大きな市場と夢があり、この急激な変革の時代に本当にマッチしているコア技術の一つであると確信しています。

理事

牧野克則

(株)マキノ 代表取締役副社長

清澄化工業会の夢と将来

1.はじめに

1997年4月に最初の設立総会を行って以来満3年が経過し、会員も当初の約35社から約85社に倍増した。その間各種の委員会やLCP分科会を設立し、講演会、工場見学など10以上の行事を実施し、多忙な会員のご協力によりその活動は年々活発化している。今回2000年に際して「清澄化工業会の夢と将来」という題で寄稿する機会を得たので思いつくまに述べます。

2.清澄化工業会の目標と魅力

本工業会の目標は会の趣旨に賛同される広範な分野にまたがる会員企業が世界に伍していけるだけの技術力、営業力のレベルアップをするために必要な技術情報、情報交換およびビジネスのチャンスを得られる場を多く提供することである。そのためにはその組織が有機的に連携し、うまく運営されていくことが肝要である。組織の運営は会員の協力なしではできず、会員の協力は組織に魅力がなくてはえられない。そのためひとつの組織である工業会の魅力をどう形成していくかが課題である。

一般に魅力ある商品が具備していなければならない要素は①コスト、②機能性、③安全性、④操作性、⑤快適性(美的感覚、安心感、開放感、シンプルなど)、⑥環境調和性、⑦能動性(主体的参加意識)、⑧娯楽性、⑨個性(非画一性)などである。魅力ある組織造りも魅力ある商品造りに似てはいないだろうか。組織と商品の差は商品は一度生産されたものはその状態に変化は生じないが、組織は異なる参加目的と意志をもった人の集合体であるために経時変化をする。それだけにその魅力を維持するのは難しい。本工業会を持続的に魅力あるものにするのが夢であるが、魅力ある工業会にするための要素について私見を以下に示す。

(1) 開放性

多くの工業会は民間および各省庁所轄を問わず同業他社の組織であることが多く、特に利益に直結しやすい組織は排他的である場合が多い。同類企業の組織では同類の情報しか得られないことが多く、工業会の裾野と視野を広げるためには他団体との交流を広め、情報を交換する、異業種の企業なども自由に入会できる、また魅力がなくなれば自由に退会できる開放性が必要である。さらに会員の要望に対して迅速に対応し、広く情報公開をすることも重要である。

(2) 先進性

発展のためには常に時代の要請に敏感に対応し、かつ一

部は時代を先取りする活動内容を実施する必要がある。ISO14000およびLCPに関する講演会の実施やLCP分科会および規格・標準委員会の設立はそのための活動と位置付けている。

(3) 多様性

モノカルチャー、単純種になると文明や生態系が壊れていくと同様に、組織の活性化には多様な業種、人材、自由に動ける小組織の存在が必要不可欠である。多様性があれば多様な情報が得られる。本工業会は幸いこの多様性には恵まれている。

(4) 公正性

組織の基本はすべての会員に公正に情報や機会を提供することである。しかしながら本工業会の活動に積極的に参加される人もいれば、消極的な人もいる。ほとんど参加されない人は非常に多忙であるか、あるいは本工業会の内容にあまり魅力を感じていないのかもしれない。しかしながら「虎穴に入らずんば虎児を得ず」ではないが、多忙の中に自ら積極的に参加し、異なる分野と経験を持つ人と接して始めて自身のためになるものが得られる。これも公正性のひとつである。本工業会としては会員全員がどれかひとつ以上の委員会や分科会に参加できるように工夫していく必要がある。

(5) 国際性

日本のほとんどの工業会は海外視察はあっても国内だけの活動に留まっている場合が多い。しかしながら低価格で品質も中程度の海外品の流入、アジア諸国の技術発展が目覚ましく、世界の動きに対しても敏感に対応して事業を実施する必要がある。世界濾過工学会は学会というよりは工業会に近いものであるが世界中に会員を擁している。本工業会も世界濾過工学会と同様な国際性を目指す必要がある。本工業会内に国際交流委員会があるが、その活躍に期待したい。

(6) 健全性

組織の健全性(安定性と持続性)は財政的基盤と会員の活動参加に対する積極性にかかっている。現在は日本フィルター(株)に全面的に事務局をお願いしているが、自前で事務局をもつだけの会費収入がないため、会員企業間で負担を分担し合うシステムの構築が求められており将来の課題である。また活動の肥大化は必ずしも健全ではないので状況に応じて小組織のscrap and buildを実施する必要がある。

3. 将来の事業

実際にできないは別として以下の将来構想を述べたい。

(1) 準公的試験機関

規格・標準委員会では清澄化関連技術の用語の整理から着手しているが、最終的にはろ過技術を手始めとして推奨試験法の確立と依頼測定、標準試験液の製造と販売を行い、できれば製品規格のガイドラインの策定を目指す。すなわち、液体清澄化に関連する技術・製品の準公的標準化・試験機関になれるだけの力量のある工業会としたい。

(2) グローバルな工業会

現在の会員はすべて日本企業であるが、本工業会の性格から日系現地法人も含めて海外企業を会員にすることが重要で、先に述べた国際性にも関係する。そのためには海外におけるキーパーソンを得て、海外企業にとって有益な日本情報を満載したNews Letterの英語版を作成する必要がある。また工業会が中心になって発展途上国への技術援助・移転を支援することが日本に求められている。特にアジア圏では共存共栄を図ることを検討する必要がある。

(3) シルバー企業設立の支援

少子・高齢化が進むにつれ、専門技術を持つ年配者は定年退職後も有力な戦力である。工業会に協力されている人は私も含めて50才以上の人が多い。今後も工業会が存続するとすれば多彩な技術と経験を持つ有能な人材の活躍の場を提供することは工業会の役目である。シルバーベンチャーやシンクタンク設立に協力できれば良い。

(4) 展示会の開催

最近の展示会は総花的なものは衰退し、より狭いテーマで専門化された展示会が活況を呈している。しかしながら個別テーマでは複数の展示会に出展せざるを得ず、また来観者は求めている分野の広域関連技術を得ることができない。そのため今後の展示会の方向性は「専門と総合の調和」を目指したものが主流となる。本工業会の内容はこの概念に適合する。最初は共同開催であっても、いずれは国内外に門戸を開けて出展社および来観者にとって有益な独自の展示会を近い将来に開催したい。

(5) 女性会員の活躍

女性の社会進出は進んでも女性技術者の数はまだ非常に少ない。しかしながら工学部でもかなり女性が増え、ある工科系私立大学では学科にもよるが約1/3が女性という所もある。本工業会にはまだ一人も女性会員はいないが、将来は男性

とは異なる発想と感性をもつ女性会員の参加と活躍は工業会の発展に不可欠と思われる。そのためには我々男性自身の考え方と工業会の有り方を変える必要があるかもしれない。

(6) 企業会員による運営

本工業会は基本的に企業会員により構成されており、大学関係者は協力会員である。現在はまだ立ち上がり期間なので私を含め協力会員が会の発展のために率先して協力しているが、企業会員が自社を含めて会員のためになるように実質的に組織を運営し、我々は企業ができない部分を手助けをするというのが本来のあるべき姿である。会員の更新代謝を含めて遠からぬ将来にそうなることを期待している。

4. おわりに

現在は企業のためのみに生きるのではなく、個人のやりがい、生きがい、社会貢献を求めて働く時代になっている。組織の運営も同じである。要は清澄化工業会は何を創造するのか、それが自分自身、工業会、企業および社会にどう活かされ、貢献するのか、のソシオ・アソシエーションに対する明確なビジョンやコンセプトがなければ会員の参加意欲を高めることができない。将来におけるそのビジョンとロードマップを作り、それを実行し、さらに恩恵を受けるのは会員個人であることを忘れないでほしい。

<横浜国立大学 松本 幹治>



2000年 第1回講演会報告

—液体清澄化分野における微生物制御とその技術動向—

去る2月22日に開催された「液体清澄化分野における微生物制御とその技術動向」の講演会に参加致しました。

当社では、製薬・食品などの製造過程にて微生物汚染制御に用いられるメンブランフィルターを扱っており、直接関わりのある講演内容ということで、大変興味をもって参加させて頂きました。今回は、今まであまり特別に取り上げられることのなかった微生物というテーマでしたが、大勢の参加者が集まり、関心の高さを知ることができました。

微生物は我々人間にとって、有用物質を生産するなど有益である良の面、逆に体に害を与えるなど悪の面の両面があり、その捉え方によって制御の考え方が変わってきます。今回の講演会では、各講演者の立場から講演をして頂き、全体を通して両面の考え方に触れることができました。



石関先生

第一の講演は、工業会顧問の石関先生による「微生物とその制御管理」—特にバイオバーデンの考え方—であり、微生物の悪の面を制御するという立場から、化学物質とは異なる微生物制御管理の考え方について、先生の意見を織り交ぜながら説明して頂きました。現状の微生物管理に必要な、目的意識を明確に持つこと、対象物に対応した理に適

った理論をもとに科学的根拠づけをすること、用語の定義の明確化などについて、基本的なことなのかもしれませんが忘れがちな内容の大切さを改めて気付かせて下さいました。特に私共のようなフィルターメーカーおよび医薬品・化粧品・食品などの製造管理者には、大変参考になる内容でした。



本間先生

第二の講演は、キッコーマン(株)の本間先生による「食品工場における微生物管理・HACCPの考え方」—ATP測定を利用した迅速衛生検査の新展開—でありました。食品分野に限らず培養法による微生物検査は、判定に時間がかかるという欠点をもっており、微生物管理に携わる人々の迅速測定への期待は大変大きいものだと思います。微生物が

いるか、いないかといった厳密な判定へのATP測定法の適応はまだ難しいようですが、食品の微生物管理という面では、食品出荷前に判定がつく事や、食品残渣等を測定し、二次汚染を検出するという考え方が今後ますます取り入れられていくであろうと感じました。



倉根先生

第三の講演は、工業技術院生命工学工業技術研究所の倉根先生による「微生物の立場から見た環境浄化」であり、微生物の良い面を利用する、前二つの講演内容とはやや着眼点の異なる内容でありました。近年注目度の高い環境保全の観点から、バイオレメディエーションの世界の動向、微生物を利用した汚染修復の成功例、今

後の可能性についての紹介、説明をして頂きました。環境は最も注目されているキーワードの一つであるとともに、バイオレメディエーションが新しいビジネスになり得るといってお話もあり、参加者の中には、早速興味を持たれた方もいらっしゃるのではないかと思います。

最後は、パネリストに講演者各先生に加え松本教授にも参加して頂いた、「清澄化工業分野における微生物の占める意義と将来」というテーマでのパネル討論でした。様々な分野の方々とパネリストとの質疑が交わされ、改めて工業会メンバーの微生物への関心の高さを確認致しました。また松本教授からの提案をきっかけに、本講演会参加者の賛同を得て、今後も微生物をテーマに取り上げた講演会を催すことになりました。今回限りではなく、今後も継続していくことを大変喜ばしく思います。



パネル討論会風景

全ての講演終了後には、会場を移して技術交流会が行われました。日頃なかなかお話しする機会のない企業の方々と情報交換や、今回の講演者の方々と更なる討論など、参加者全員、大変有意義な時間を送ることができたのではないかと思います。私自身、今回が講演会、技術交流会とも初参加でありましたので、今後ともこの工業会での繋がりを大切に、また次の機会にもぜひ参加させて頂こうと思っております。

<ザルトリウス(株) 奥平 真実>

展示会・学会報告

第6回 国際醸造・飲料工業展

本展示会が開催された東京ビッグサイトの東ホールは『FOOD SHOP 2000』、『HOTELS JAPAN 2000』との同時開催であったことも関係し、多種の業種に渡る人々で大変な賑わいを見せていた。今回、国際醸造・飲料工業展に出展されていたブースは、66(イギリス9、イタリア5を含む)であり、企業数にして69社が参加した。出展の傾向としては、世情を反映しているごとくにHACCPを中心とした衛生管理システム、健康維持食品の提案、食品の安全性対策といった展示内容が目立った。



会場入口付近

ろ過、清澄化に関係する展示では、サッポロビール(株)の珪藻土ろ過システム、三浦工業(株)の回転式ろ過装置や中空糸のRO、MFろ過装置、東芝セラミックス(株)のセラミック膜フィルター、テラダトレーディング(株)の再生可能なデプスフィルターなどが出されていた。また、海外からの出展では、VELO SPA(イタリア)やCARLSON FILTRATION LTD.(イギリス)からもフィルターシステムの展示を見ることが出来た。ろ過ではないが、(株)三樹嘉七商店から柿タンニンを主成分とする清澄剤が紹介されていたのが興味を引いた。また、紀州技研工業(株)のインクジェットプリンタの展示やコーパックインターナショナル(株)から紹介されていたビールやワインのサーバーロボットは、食品を扱う展示会の中では異質なものに感じられたが、品質向上の側面のみから評価しがちな食品を一商品として見た場合に求められるデザインやキャラクターの重要性を感じさせてくれた。

各ブースの賑わいもさることながら、会場奥に設けられた『地ビールの旅』の試飲コーナーでは、思い思いのビールを楽しむ来場者の姿が多く見受けられた。

<(株)加藤美蜂園本舗 寺川 美加>

第25回 国際食品・飲料展 FOOD EX JAPAN 2000

—“食”が担う地球の新世紀 “食”の楽しさ再発見—

2000年国際食品・飲料展が3月7日から10日まで、幕張メッセにおいて開催された。また、同時開催されている第6回国際醸造・飲料展の東京ビッグサイトと幕張メッセを結ぶ直行バスが運行され、来館者の便宜が図られていた。

国際食品・飲料展は幕張メッセの8ホール全てを使い、1~4ホールを海外ゾーンとして野菜・乳製品・食肉などの食材から加工食品並びにビール・ワインなどあらゆる食品が展示され、試飲・試食をととして日本の外食産業市場への進出を目指し商談が行われていた。日本人の新しい物好きと外国製品への憧れで乗り込む隙間が生まれるかも・・・?

そして、5~8ホールの国内ゾーンでも盛んに試食が行われていた。例えば、串に刺した生の鶏肉が1時間で200本もタレの付いたやきとりになって出てくるし、発酵作業なしの冷凍庫に入ったパン種が15分で食卓に上がり、お湯を注いだけで本格的みそ汁やスープが登場する。「美味しいものを簡単に!」が現代のニーズ。一方、消費者の健康食品やナチュラル食品への関心は益々高まっている。そして、今年は“第15回ふるさと食品全国フェア”の併設開催と共に“日本の味全国食品博”として、国内各地の食材・加工食品・飲料(特に日本酒)の展示が増設されていた。

集中展示としてオーガニック食品をはじめ、低減農薬栽培や自然栽培・飼育の生鮮・加工食品と健康志向食品の出展が増え、関心の高さを示している。また、「新製品・イチ押し製品コーナー」を入り口前に設置し、最新の商品情報を提供しているのは一工夫あり。主催者側の出展の配置、検索方法、特別企画など見やすく、解り易く工夫されていた。

<(株)加藤美蜂園本舗 吉岡 薫>



会場内風景

ニュースレター・アンケート調査報告

この度はニュースレター・アンケート調査にご協力頂きありがとうございました。調査結果は下記の通りとなっております。回答数が25と調査書の回収率があまり良くなかったのが残念でしたが、広報委員会の編集方向(方針)が、おおむね会員の皆様に納得頂いているものと理解致しました。ご意見・ご要望につきましては、今後機会をみながら紙面の反映して行くつもりです。今後ともよろしく願い申し上げます。〈広報委員会〉

LFPI ニュースレター・アンケート調査結果集計

巻頭言	0	5	10	15	20
各委員会の活動報告		7			17
理事会活動報告	2				
会員企業紹介					20
会員動向(新会員/退会会員)	1				
当会主催の行事報告					18
行事予定表		7			
当会以外の展示会・学会報告				15	
アンケート調査報告	3				
一般展示会スケジュール		5			
ブレイクタイム		5			

今後取り扱ってもらいたいテーマ・及びその他の意見

- *現状で立派なニュースレターです。編集のご苦労に感謝申し上げます。
- *今の編集内容でOKと思っています。

- *会員のホームページ、メールアドレス、電話番号等の情報を載せて下さい。
- *「成功例」、「失敗例」を各事業所ごとに取り上げると面白いかもしれません。(失敗例はあまり口外したくないでしょうが・・・)
- *専従者のいない中でよく頑張って作っておられると思います。
- *基本的に今のままで良いと思いますが、できれば会員企業等の新製品、新技術の紹介を掲載して頂けたらと思います。
- *液体清澄化に関するミニ講座の連載や、論文、記事、書籍の紹介。
- *クレーム(事故)情報。クレームの例、その原因、処理方法。(クレームにはメーカーの原因、ユーザーの使い方による原因等があります。その原因、処理方法は各社とも参考になるのではないのでしょうか。)
- *各社の新製品、又はメイン商品を紹介するコーナーを取り扱ってほしい。
- *官庁サイドの研究機関等の紹介。
- *興味深く読まさせて頂いております。ブレイクタイムの延長線で、(清澄に関わる)ちょっと変わった、面白い話などをわかりやすく説明してくれるようなコーナー。

企業紹介

日東電工株式会社

当社は、1918年に電気絶縁材料の国産化を目的として創業して以来、高分子材料の合成・加工技術を核として新機能材料・製品を開発して参りました。例えば、様々な粘着テープ、半導体封止材料・液晶関連光学フィルム等の情報関連材料、自動車・家電・住宅用複合材料から経皮吸収型テープ製剤に至るまで、幅広いマーケットに新しい価値を提供して参りました。

その中で、工業会の会員の皆様に関連の深い製品といましては、精密ろ過膜、限外ろ過膜、逆浸透膜などを用いた各種膜モジュール関連製品がございますが、これらは日本及び米国のメンブレン専門工場にて製造し、世界に供給させていただいております。

目指すは、世界レベルでマーケットの隙間を埋めるグローバル・ニッチ・トップです。今後も、蓄積されたコア技術とノウハウを武器に、お客様のニーズや時代の変化に対してスピーディーに対応し、新しい価値の創造にチャレンジしていきたいと思っておりますので、より一層のご指導、ご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。
(磯岡 豊)

みづほ工業株式会社

昭和10年より個人経営として、温水ボイラーを主とした各種タンク類の製缶並びに機器を製作して来ました。昭和25年5月に特殊ろ過機及び攪拌機等の設計、製作を開始し、年々実績を重ね昭和35年5月に株式会社に改組し、化粧品工業&医薬品製造メーカーに不可欠な乳化工装置や、充填機などの生産設備を提供しております。

昭和44年より社会環境の創造をめざして公害防止プラントを手掛け、以来開発、分析センターであらゆるニーズに対応した技術を確認、システム化して「ハイドロ-X」「ドラムドライヤー」を世におくり、また中空糸及びRO膜を応用した高度な水処理にも積極的に取り組んでおります。平成11年10月(株)サノヤス・ヒシノ明昌グループに参入しました。

業務の拡大、研究開発力の強化、取引先各位に対するサービスのより一層の充実をはかっております。また40周年を記念して、中国に独資の現地法人美之賀機械有限公司(無錫)を設立しました。
(埴 直)

ベカルト アジア

当社は、世界最大の独立系スチールワイヤーの製造会社であるベルギーに本社を置くベカルト社の日本法人として1968年に創業し、ベカルトグループのワイヤー、スチールコード、金属繊維製品の販売を行っています。

集束伸線法で製造される2ミクロンから30ミクロンの太さの金属繊維は多種多様な用途において製品化されています。その一つがフィルター用ろ材に使用されるステンレス繊維焼結不織布Bekipor®です。特徴である高い空隙率を活かし、低圧力損失、高透過性ろ材として、ポリマーフィルトレーションを始め、さらに早く、さらに細かくが望まれるインクジェットプリンターのフィルター等に使用されています。また、最近ではマイクロフィルトレーション用クロスフローエレメントとしてBekicross®の販売を開始しました。目詰まりが少ないクロスフロー方式と高透過性ろ材とを組み合わせ、高効率での連続運転が可能となり、様々な清澄化に対応しています。

今後は当社の2大技術である、金属繊維の製造方法とコーティング技術とを活かし、且つ皆様との交流を深めつつ清澄化技術の発展に貢献できればと考えております。

(作田 恭一)

株式会社大川原製作所

当社は、昭和2年創業以来、乾燥装置の専門メーカーとして化学、製菓、食品、飼料等の産業分野に流動層乾燥装置をはじめ、各種乾燥装置を数多く納入してまいりました。

また、公害防止装置の重要性にいち早くから着目し、産業排水、し尿、下水の処理施設より発生する汚泥等の処理用としてスラッジドライヤーを開発、さらに流動焼却炉、円形焼却炉を開発しました。スラッジドライヤーとこれらの焼却システムは、対応範囲の広い汚泥処理装置として、汚泥処理分野でユーザーより高い評価を得ております。さらにコンポスト装置、炭化装置など環境関連分野での商品化をすすめております。

一方、ファインケミカル、バイオケミカル分野の発展に伴い、ボール入り流動層乾燥機、連続式真空乾燥装置等を商品化するとともに、1983年には遠心式薄膜真空蒸発装置の技術導入により、粉体処理に加え液体処理分野にも進出しました。

液体清澄化関連ではろ布反転式遠心分離機の商品化、最近ではろ過機能と乾燥機能を組み合わせたろ過乾燥機を開発いたしました。今後とも工業会とともに新たな技術開発にチャレンジしていきたいと考えております。(脇屋 和紀)



ブレイクタイム

ゲッティンゲンだより、いや、お菓子なたより

私の旧師が3年ばかりゲッティンゲン大学の聖書学の教師をやっていた頃、「ゲッティンゲンだより」と名づけた随想を小冊子に寄せいていたのは随分昔の話。

その頃は、Zsigmondyが世界最初のメンブレン開発を行い、当今、流行のベンチャービジネスのはしりであったザルトリウスが初めて企業化に成功した町がゲッティンゲンであることなど知る由もなかった。私とその町を訪れたのは、その事実を知ってからであったが、まず、感激したのは師が踏んだであろう同じ土を踏みしめたこと、何度かドイツに来て、見つけられなかった本場のドレスデン風バウムクーヘンに出会えたことである。

その店はマルクプラッツにある旧市庁舎の前を通る、文字通り、この町唯一の目抜き通りとも言えるヴェンダーストラッセに面している店で、この町では大きい部類のケーキ屋である。ショーウィンドーに並んでいるものはまぎれもないドレスデン風バウムクーヘンであった。「バッハマン」のものに比べると、矢張り、繊細さに欠ける。味もストレートで味わいが深くない。それでもドレスデンに行かずしてこのバウムクーヘンに出会えたのは何か得した感じがした。生地を心棒に塗り、これを回転させながら焼き上げては生地を塗り重ねる作業が1時間程繰り返され、あの年輪が出来上がる。根気のいる仕事だ。私なんぞ、とてもやれることではない。バウムクーヘンは最もドイツらしいお菓子の一つだろう。

ドイツのお菓子と言えば、クリスマスに食べるシュトーレンが思い浮ぶ。ドイツのシュトーレンを何度か食べたが、「まちいえる」のシュトーレンにはあらゆる点でかなわない。その剛直さ、素朴さを除いては、シュトーレンは、その剛直さに、上にかかった粉砂糖が口の中でシューワと溶けていく感じがコントラストとなって、和三盆の感覚に近づいていく。その繊細さがドイツのものにはない。従って、渡独の折の土産は矢張り、パンに限ると、フレガス(フランクフルト)のロホナーに急ぐことになる。

お菓子は実に素晴らしい。豊かな時を与え、イメージを膨らませる。その日の気分によって、大振りのティーカップにたっぷり紅茶を注ぎ、「ベシュミオン」のマドレーヌを口にしながらか、「失われた時を求めて」を広げる。「ボン・ヌフ」のモンブランに手を伸ばしながら、ベロッキオ橋を思い浮かべる(ボン・ヌフが出来る前は、パリの橋はベロッキオ橋のように2層構造であった)……。 <ザルトリウス(株) 松永 有志夫>

*会員の皆様には、ブレイクタイムへの自由な投稿をお待ちしております。文字数は1000字前後です。

行事予定表

見学・講演会のお知らせ

当会では、下記日程で、大阪地区での見学・講演会を計画しております。詳しくは、後日送付される案内状をご覧ください。尚、この度の行事は当会・関西地区の活性化という主旨もあり、関西地区の会員の皆様はもとより、関東および他地域からの積極的な参加を期待しております。

日 時:6月15日(木) PM 1:00~PM 7:30
6月16日(金) AM 9:30~PM 4:00

見学予定:武田薬品工業大阪工場/柴島浄水場/サントリー山崎蒸留所

講演:3題(詳細は未定)

会員交流会開催のお知らせ

この度、異業種交流を目的とした会員交流会を下記の通り幹事会主催で開催致します。当会会員でありながら、なかなか異業種他社との交流の機会が持てない会員の皆様の参加を期待して計画されたものです。ふるってご参加下さい。詳しくは案内状をご覧ください。

日 時:5月10日(水) 16:00~19:00

場 所:横浜国立大学

講演:1題「異業種交流は経営戦略の手段」

編集/発行:日本液体清澄化技術工業会 広報委員会
住所:横浜市戸塚区上矢部町2107-3
TEL (045) 811-1533 FAX (045) 813-9450
LFPIホームページ URL <http://www.lfpi.org>